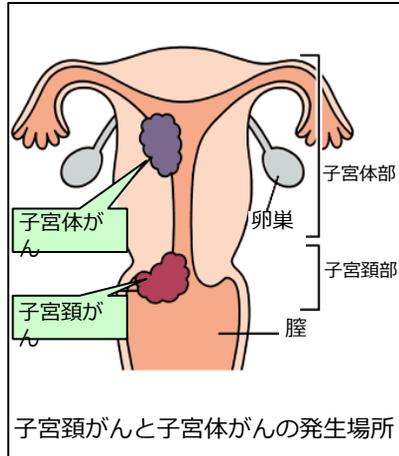


当センター人間ドック（基本コース）の婦人科検査は、婦人科診察時に専門医による内診と子宮頸がん細胞診をおこないます。また、経膈超音波検査と子宮体がん検査は、オプション検査としてどちらも診察時に一緒に行えます。

子宮がんとは？ 「子宮頸がん」と「子宮体がん」の違いは？

子宮下方の入り口にできるがんを「子宮頸がん」、子宮奥の内膜にできるがんを「子宮体がん」といいます。

	子宮頸がん	子宮体がん
発生する場所	子宮頸部	子宮体部(内膜)
主な原因	ヒトパピローマウイルスなど	エストロゲン(女性ホルモン)の長期的な刺激など
好発年代	20~30代	50~60代
初期の症状	不正出血、帯下増加など	不正出血、帯下増加など
罹患しやすい人	ヒトパピローマウイルス罹患患者(頸がん患者の90%)	肥満、閉経が遅い、未産婦、乳がんや更年期症状に対するホルモン療法など
検診の方法	細胞診	細胞診
当院ドックでは	基本コースには検査項目に含まれますが簡易コースはオプション検査となります	オプション検査となります



子宮頸がんと子宮体がんの発生場所

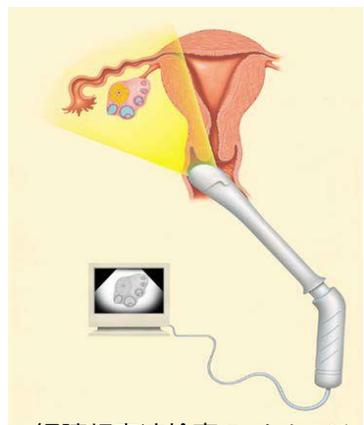
卵巣がんとは？

卵巣がんは婦人科系がんの中で乳がんに次いで2番目に発症率が高い疾患です。40代~60代の女性に最も多く見られますが、思春期から高齢の女性まで発症する可能性があり、年々増加しています。

卵巣がんは、妊娠の経験がない方や初潮年齢が早い方、閉経が遅い方、子宮内膜症の方、家族に乳がんや卵巣がんを発症した人がいる方などに発生率が高いと言われています。

経膈超音波検査とはどのような検査ですか？

経膈超音波検査はプローブという医療器具に、使い捨てのキャップをかぶせて膈内に挿入して行う検査です。内診ではわかりにくい子宮や卵巣の病変（子宮筋腫、卵巣腫瘍、子宮内膜ポリープ、子宮体がんなど）を早期発見するのに有用です。



経膈超音波検査のイメージ

子宮体がん検査とはどのような検査ですか？

子宮内膜の細胞を専用の細いチューブで採取して検査します。50歳以上もしくは閉経後で不正出血のある方、あるいはリスク因子（未婚、不妊、高齢妊娠、未産婦、月経不順、エストロゲン服用歴、糖尿病、肥満など）のある方に施行をお勧めします。

子宮頸がん検査と違い、正診率が70~90%と低いため、一般的ながん検査の適応にはなっていません。

器具を挿入する際に、痛みや出血を伴うことがあり、また、検査に必要な十分な細胞を採取できないことがあります。

このような方は経膈超音波検査をおこない、子宮内膜の厚みを調べることにより子宮体がんの可能性を確認することができます。